

『横笛草紙』 弘法大師笛説話と義経物

樋口 千 紘

キーワード…横笛草紙 笛説話 源義経 平敦盛

はじめに

御伽草子『横笛草紙』は、滝口入道と横笛の悲恋譚である。同様の横笛説話は『平家物語』に既にあり、平維盛の善知識となった滝口入道の発心譚として収録される。『横笛草紙』は諸本の数が比較的多く、現在十七本が確認される^①。その中で、古写本の一つである清涼寺本に、芋環型の異類婚姻譚を用いた横笛の出生譚がある。その概要を以下に示す。

横笛の母である侍従は、鞍馬寺で得た夢想に従い深泥池へ行き、そこで出会った笛を吹く殿上人と契りを結ぶ。侍従は殿上人の正体を探るべく、狩衣の胸に針をさし、その跡を追う。するとその殿上人は深泥池の大蛇で、鞍馬寺の多聞天の少将であった。大蛇は先前の機縁によって侍従の胎内に子を宿したことを告げ、笛を形見として与えて消える。残った

侍従は生まれた子を横笛と名付けるが、その子に形見の笛を添えて山に捨てて。横笛は十五の年に入道相国に見初められ、建礼門院の侍女となる。

横笛は、母侍従と父深泥池の大蛇から生まれた女性である。しかも深泥池の大蛇は、侍従の祈誓を承けて現出した鞍馬の多聞天であった。大蛇は、笛が弘法大師に由来することを説き、三管の笛「青葉」「蟬折」「小枝」の中でも「青葉」を形見として与えて消える。横笛の名は、形見に笛を渡されたことによるものである。

弘法大師が天竺に渡って三つの笛を得たとする弘法大師笛説話は、真言宗で流布する大師伝には見られないが、幸若舞曲『笛の巻』に詳しく語られている。御伽草子『御曹子島渡』にも見え、いずれも義経に関わる。ただし、幸若舞曲『笛の巻』に登場する笛の名は「大水龍」「小水龍」「青葉」であり、御伽草子『御曹子島渡』では

「蟬折」である。『横笛草紙』を含め、由来は共通するが笛の名に異同がある。また、「蟬折」「小枝」は元来、『平家物語』に以仁王や敦盛の笛として登場するが、笛の名と、その由来に混同が見られる。

『横笛草紙』は滝口入道と横笛の物語であり、以仁王や敦盛、そして義経は登場しない。しかし、弘法大師笛説話を介して『平家物語』やその周辺の物語、殊に義経の説話と深く関わるものであることが察せられる。

よって、本稿では、義経をめぐるさまざまな名笛の伝承を整理し、その中に『横笛草紙』の笛説話を位置づけることによって、横笛に渡された笛がどのようなものであるのか、『横笛草紙』にどのような作用をもたらすのかを明らかにしたい。

一、蟬折、小枝、青葉

――『平家物語』ゆかりの笛「蟬折」「小枝」

横笛出生譚の弘法大師笛説話にある三管の笛のうち「蟬折」「小枝」は『平家物語』巻第四「大衆揃」に見える伝來說話により、その名が知られている。

此宮（以仁王）は、蟬折、小枝ときこえし漢竹の笛を、二つもたせ給へり。かの蟬折と申すは、昔鳥羽院の御時、こがねを千両、宋朝の御門へおくらせ給

ひたりければ、返報とおぼしくて、いきたる蟬のごとくに、ふしのついたる笛竹を、一よおくらせ給ふ。「いかながこれ程の重宝を、左右なうはゑらすべき」とて、三井寺の大進僧正覚宗に仰せて、壇上にたて、七日加持して、ゑらせ給へる御笛なり。或時高松の中納言実衡卿参ッて、この御笛をふかれけるが、よの常の笛のやうに思ひ忘れて、ひざよりしもにおかれたりければ、笛やとがめけん、其時蟬折れにけり。さてこそ蟬折とはつけられたれ。笛の御器量たるによつて、この宮御相伝ありけり。されどもいまをかぎりとおぼしめされけん、金堂の弥勒に参らッさせおはします。^③

ここでは、「蟬折」「小枝」は以仁王の笛として登場する。この二管の笛は、鳥羽院が宋朝から返報として得た笛竹を、三井寺の大進僧正覚宗の加持を経て彫ったもので、笛の名手であった以仁王に相伝された。その後、「蟬折」は三井寺金堂の弥勒菩薩に奉納され、「小枝」は以仁王が最期まで所持した。^④また、『平家物語』巻第九「敦盛最期」には、平敦盛の笛として「小枝」が登場する。ただし、以仁王の「小枝」は「こえだ」と読むが、敦盛の「小枝」は「さえだ」として区別されている。^⑤

件の笛はおほち忠盛笛の上手にて、鳥羽院より給は

られたりけるとぞきこえし。経盛相伝せられたりしを、敦盛器量たるによつて、持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。

敦盛の「小枝」もまた鳥羽院由来の笛であるが、相伝に異同があり、以仁王の「小枝」とは別の笛である。しかし、幸若舞曲『敦盛』に注目すると、以仁王の「小枝」が敦盛の手に渡ったことが記されている。それは、熊谷直実が敦盛を討った後、義経に見参する場面にある。義経は、敦盛の遺品から笛を見つけ、『平家物語』にある「蟬折」「小枝」の由来を述べたあと、

小枝をば、御最後迄持たせ給ふ由、承るが、水無瀬光明山にて、討たれさせ給ひし時、此笛、平家の手に渡る。一門の其中に、笛に器用を召されしに、弱冠なれども、敦盛は、笛に器用の人とて、下されけると承る。^⑥

と述べる。以仁王が最期まで所持した「小枝」が平家の手に渡り、敦盛に相伝された。^⑦『平家物語』と幸若舞曲『敦盛』では「小枝」の相伝は異なるものの、鳥羽院から賜った笛という点は共通しており、また、以上のことから「小枝」が以仁王や敦盛が所持したとする名高い笛であったことがわかる。^⑧

一―二 敦盛の笛「青葉」

「青葉」は、『平家物語』にその名はないが、鎌倉時代の楽書『続教訓抄』巻第十二にあり、「葉二」と同管とされている。

或云ク、葉二同管ナリ。窃ニ此儀ヲ案ズルニ、其謂ナキニアラズ。蟬ニ青葉アリ、葉ニ白露ヲ成ス、マコトニ鬼神ノ資産ニアラズハ、寧如レ此ノ靈異アラムヤ。加之、一管ノ異名ニ葉トハ云驗ヲ、故ニ青葉葉二鬼笛、皆一管ノ異名歟。^⑨

鬼の笛としての「青葉」は『神道集』『諏訪大明神五月会事』に、「葉二」は『江談抄』にそれぞれあり、鎌倉後期において「青葉」「葉二」は混同されていた。^⑩御伽草子『青葉の笛の物語』は、在原業平が箕面の仙郷の童子から「青葉」を授けられる話である。これらの物語では、「青葉」は鬼の笛、または仙童から授けられる霊異ある笛として扱われ、『平家物語』に関わらない。

しかし、『平家物語』周辺の物語や芸能にその名がある。謡曲『敦盛』では、列举される笛の中に「草刈の吹く笛」として登場する。

身の業の、好ける心に寄竹の、好ける心に寄竹の、小枝蟬折さまざまに、笛の名は多けれども、草刈の吹く笛ならば、これも名は、青葉の笛とおぼしめせ。^⑪

「小枝」「蟬折」の名も見えるが、笛の由来は語られない。

ここで、『須磨寺笛之遺記』に注目したい。『須磨寺笛之遺記』は、別名『小枝の笛物語』といい、『源平盛衰記』を典拠として『平家物語』の内容を縮約化し、「蟬折」「小枝」の由来、また敦盛説話及び熊谷直実発心譚を載せる。笛の由来を記すことで、須磨寺蔵の笛の由緒正しさを述べる。敦盛の「小枝」が、父経盛から相伝されることは『平家物語』とも共通するが、その由来は異なり、弘法大師が大聖文殊とのやりとりの後、楚国で得た竹から笛を彫りだしたことになる。また、そこには、

一節にちいさき枝三つ出たる故に小枝と名く。是楚竹の驗とぞ聞えし。又枝の葉色後まで青かりければ、青葉共いひ習はしけると也。さる程に小枝蟬折は、楚漢両土の笛也。¹³⁾

とあり、「小枝」と「青葉」が同じ笛とされる。また、熊谷直実が義経に見参する場面にも「青葉」が登場する。

其後笛を取り出し、義経一目見て驚きて指戴き、「是こそ名に聞し弘法大師のゑり給ふ青葉の笛御ざむめれ」と、其後しばし案じて被申けるは、「此笛凡人の手に持て穢さむことはあたらし儀也。同じくは此

笛を此所に残し置ばやと思ふ也。其故は一には海内無双の名地、二には平家敗軍の支証也。但上洛の時に奏聞し、義経申請て当所の仏殿に納べし。」

敦盛の遺した笛は、義経によって「弘法大師のゑり給ふ青葉の笛」と説明され、須磨寺に奉納される。『平家物語』幸若舞曲『敦盛』にも義経に見参する場面はあるが、笛の行方までは記されていない。近世の刷り物『摂州須磨寺略縁起』には「平の敦盛公隨身せられし遺物も、源の義経公より此宝前に寄供せり。」¹⁴⁾とあり、須磨寺にある「青葉」は義経の手によって納められたことを記す。須磨寺に敦盛の「青葉」があることは、多くの地誌や紀行文に残されており、例えば元禄九年（一六九七年）刊の『難波丸』には「又当寺の宝物に大夫敦盛の青葉の笛伝はれり。是又未曾有の霊管なり。」とあり、「青葉」が須磨寺の宝物として名高い笛であったことがわかる。¹⁵⁾敦盛の「青葉」は、須磨寺の古記録『当山歴代』正保五年（一六四八）の記事に、

同年從正月十七日思立、二月自十八日卯月八日迄、御本尊百式拾年廻之御開帳致、并不動、釈迦、敦盛之御絵、青葉御笛、其外寺物共諸人^ニ拜マセ、是^ニ仍貴賤群集而驚耳目者歟、¹⁶⁾

とあり、敦盛の御影とともに「青葉」の笛が開帳されて

いる。須磨寺は度々大雨や火災による被害を受けており、拝観料を修復の費用に宛てていたようで、その中で「青葉」は幾度も開帳され、地誌や紀行文にその名を残すことになったのであろう。

敦盛の笛が「青葉」であることは、『平家物語』の「小枝」伝承とは異なる。しかし、『平家物語』や幸若舞曲『敦盛』と、『須磨寺笛之遺記』は、敦盛の形見を説明する場面に義経の存在を描く点で共通する。殊に、敦盛の笛が「小枝」から「青葉」へと変化する『須磨寺笛之遺記』において、弘法大師の笛説話を前提として、かつ弘法大師の名とともに義経の存在が見えることは、義経の笛由来を記す幸若舞曲『笛の巻』との関係が窺われるものである。

二、義経物にみる笛

幸若舞曲『笛の巻』は、義経が弥陀次郎に笛の由来を尋ねることからはじまり、物語の大半は弘法大師の渡天説話となっている。それは、弘法大師が唐に渡り、大聖文殊との知恵比べを経て笛を得るといった話で、唐から投げた三鈷が到達した地に高野山を開いたという三鈷説話に似た内容となっている¹⁷⁾。以下に引用するのは、幸若舞曲『笛の巻』の、弘法大師が三つの竹から笛を得る場

面である。中略部分には、弘法大師と大聖文殊との知恵比べややりとりがある。

弥陀次郎承て、「さん候。此笛と申は、讃岐の国屏風の浦にて、宝亀五年に生れ給ふ弘法大師、入唐し、(中略)葱嶺の山の麓に、一つの滝落る。かの滝の双岸に、三本の竹有。弘法、剣を抜き持つて、末の節を三節込めて切り給ひ、「契りのあらば、日本にて巡り会へや」との給ひて、川にぞ流し給ひける。(中略)筑紫の博多に上がり、縁笈取て肩に掛け、都へ上り給ひしが、旧里をしのぎ有により、讃岐の国屏風の浦に立ち寄り、父母の御墓を伏し拝み、ある磯辺を通らるゝ。寄竹一つ有。怪しく思召れて、取り上げ御覧ありければ、天竺流沙河にて切り流したる竹で有。希代不思議に思し召し、三節の竹を三つに刻み給ひて、笈の足に結び付け、都へ上り給ひしが、三節の竹が夜に入ば、五音の声を出す。五音の声と申は、宮商角徵羽、これなり。三管の笛に彫り給ふ。大水龍、小水龍、青葉の笛と申す。

弥陀次郎は、義経に笛の由来を語る商人である。義経は常葉から授けられた笛の由来を聞き、その威徳を知る。義経の笛は、弘法大師が葱嶺山流沙河から流した竹が故郷讃岐の国屏風の浦にたどり着き、その竹から彫ったも

ので、「大水龍」「小水龍」「青葉」の三管である。

同様の弘法大師笛説話は、御伽草子『御曹子島渡』にも存在する。『御曹子島渡』は、義経が兵法獲得のため様々な島を渡る物語で、笛の威徳をもって困難を解決していく。笛の名は「蟬折」であり、その由来として弘法大師笛説話がある。

かの弥陀次郎がもとより求めさせ給ふ、蟬折を取り出だし給ひ、「この竹と申すは、日本に隠れもなき、弘法大師とてありぬ、これは真言の大祖師たり。しかるに、弘法、入唐のついでに、天竺靈山に渡り給ふ時、葱嶺の嶺を過ぎ、流沙河のあなたに、一つの滝あり、この滝本に、この竹生ず。弘法、あまりに

よき竹とて、衣下なる剣を抜き、この竹を三節切り、縁あらば、また日本にて巡り会ふべしとて、流沙に流し給ふ。わが朝に流れ来り、弘法、やがて見つけ給ひ、人にものを言ふごとく、言葉を交し、取り上げさせ給ひし、不思議の竹にて候ふ」⁽¹⁸⁾とて、幸若舞曲『笛の巻』にある弘法大師と大聖文殊のやりとりはなく、笛は「蟬折」一管となる。また、幸若舞曲『烏帽子折』にも、

母の常葉の、淀の津の弥陀次郎がもとよりも、買い取らせ給ひたる弘法大師の蟬折なれば、いつくしき

ともなか／＼に申ばかりはなかりけり。

とあり、「弥陀次郎」から買い求めた「弘法大師の蟬折」があり、幸若舞曲『笛の巻』にある笛由来と関わる。

御伽草子『御曹子島渡』、幸若舞曲『烏帽子折』に登場するのは「弘法大師の蟬折」であり、幸若舞曲『笛の巻』とは笛の名が異なる。しかし、その笛が弘法大師に由来することから、『笛の巻』が意識されていることがわかる。

また、『烏帽子折』では、義経が笛を吹く際に「弘法大師の蟬折」を「草刈笛」⁽¹⁹⁾と称す。義経物の一つである古浄瑠璃『浄瑠璃御前物語』にも、「草刈笛」と称して「蟬折」が登場する。

もしも咎むる人あらば、山路が夜の草刈笛とも答ふべし。重ねて咎むる者あらば、源氏重代友切丸の続かん程、打合ふべしとおぼし召し。右の給の袂より、かの蟬折を取り出し、⁽²⁰⁾

義経は東下りの途中矢矧宿の、浄瑠璃御前の住む館から管弦の音を聞き、「蟬折」を吹く。ここでは弘法大師笛説話を用いた「蟬折」の由来は見られないが、「かの」と前を承けた文辞から『浄瑠璃御前物語』にある「蟬折」もまた弘法大師由来の笛であることが察せられる。⁽²¹⁾

以上のことから、義経物に見える「蟬折」の笛は幸若

舞曲『笛の巻』にある弘法大師笛説話の由来をもつことがわかる。しかし、「蟬折」は『笛の巻』ではなく、『平家物語』にある鳥羽院由来の笛の名である。『笛の巻』にある「大水龍」「小水龍」「青葉」は樂書にも登場し、それぞれに説話を持つ著名な笛であることから、その名を避けた可能性も考えられる。『平家物語』にある「蟬折」は「小枝」とともに伝えられるが、「小枝」は以仁王や敦盛の笛として名高い。よって、三井寺に奉納されたという記述以降、平家にも源氏にも相伝されなかった「蟬折」を義経の笛として採用したことが考えられる。

三、『横笛草紙』横笛出生譚と義経物

三―『横笛草紙』弘法大師笛説話

義経物にある弘法大師笛説話を用いながら、『平家物語』ゆかりの「蟬折」「小枝」、また幸若舞曲『笛の巻』にある「青葉」を記すのが『横笛草紙』横笛出生譚である。

以下に清涼寺本にある横笛出生譚のうち、弘法大師笛説話部分を引用する。ただし、清涼寺本は間々誤写を含む難解な本文であるため、八宮本を並列し、解説を試みたい。八宮本は、清涼寺本の本文を多く含みながら、他の諸本の独自本文をも有する一異本である。

(清涼寺本) 是に御ざある横笛は、高野の弘法大師に伝へ、ありしとき、天竺に渡り、^①流沙川^②のとき育て、申おくところとて、^②大聖文殊の御年より、三節の竹を言づて賜り。彼の比、流れけり。^③万里のしほりに言づて、^④我本国に帰らば、このもん巡りがとめとつて、捨てられたり。楚竹、^⑤とさのうちに^⑥尋ねあひ、青葉、蟬折、小枝とて、三つの笛とて作られたり。そのほかに、とりわけ青葉の笛これなり。なくくこれをとらすべし。あとの形見に見給へ。もし女兒ならば力なし。^⑦此笛ともに屠戮して、大門原上の土に埋むべし。^⑧

(八宮本) この笛と申は、大師弘法の天竺に渡るとて、流沙川の水上に、葱嶺といへる所にて、^①大聖文殊の御手より、三よの竹を川に入、八重の潮路にことづけて、^②「我本国に帰らば必ず尋ねあわむ」とて捨て、しその竹に、^③とさの海にて尋ねあひ、三つの笛にぞくられける。青葉、蟬折、小枝といひしその中に、青葉の笛とはこれ成。いまを最期の事なれば、この笛を奉る。^④たゞし御身の胎内に形見を一人こめたり。男子にてあるならば育て、父の形見と思ふべし。また女にてあるならばたちまちに^⑤たんしゆか土におくりて、この笛ともに埋むべし。^⑥

弘法大師の笛由来譚は、「是に御ざある横笛は」という大蛇の語りから始まる。笛は、「天竺流沙川」で「大聖文殊の御年より」賜った「三節の竹」を弘法大師が「捨て」、「とさのうち」で見つけ出したその竹から作られた。

まず、誤写と思われる箇所について確認したい。清涼寺本②「大聖文殊の御年」は、八宮本①に「大聖文殊の御手」とある。弘法大師は大聖文殊から竹を受け取るので、ここは「御手」であろう。また、清涼寺本⑤「とさのうち」の「うち」は、八宮本③に「とさの海」とある。八宮本が「うち」の誤写に気付いて訂正したものであり、清涼寺本の「うち」は「うら」の誤写と考えられる。次に、清涼寺本の難解箇所を八宮本に照合して確認する。

弘法大師が流沙川に竹を「捨て」る前、清涼寺本④「我本国に帰らば、このもん巡りがとめとつて」は、八宮本②「我本国に帰らば必ず尋ねあわむ」の表現をもとに解せよう。「もん巡りがとめとつて」は不明であるが、八宮本の「必ず尋ねあわむ」で解釈すれば、探し求めて見つけ出そうとする意思の表れとなる。なお、八宮本④「たゞし御身の胎内に形見を一人こめたり。」は、清涼寺本の引用本文にはないが、弘法大師笛説話の前に「汝が胎内に人のかたちをとゞめたり。」と記述されている²⁴。

八宮本⑤「たんしゆか土におくりて」は、大蛇が侍従に對して言った言葉で、生まれてくる子が女兒だった場合は「丹朱」の土に埋めよという指示か、または清涼寺本「屠戮して」から想像して「断首」であろうか。

以上のことから、横笛に渡される形見の笛は、弘法大師が大聖文殊の御手から得た三節の竹を流沙川に流し、「日本に帰ったら必ず探し出そう」という意思の通りに、とさの浦で得た竹から作ったもの、となる。

清涼寺本の、八宮本だけでは解説し得ない難解な箇所は、幸若舞曲『笛の巻』や『御曹子島渡』といった義経物の弘法大師笛説話を参考に読み解きたい。

まず、清涼寺本①「流沙川のとき育て、」は、『御曹子島渡』に「流沙川のあなたに、一つの滝あり。この滝本に、この竹生ず。弘法、あまりによき竹とて」とある。

「育てる」には『日本国語大辞典』に「大事なものとして引き立てる」という意味があることから、清涼寺本①は、流沙川で見つけた竹を良き竹だと大事にして、と解せる。また、清涼寺本⑤「とさの」浦の「とさ」を、「十三」と捉えれば、『御曹子島渡』で義経が発した「十三湊」を指すのではないか。さらに、清涼寺本⑥「尋ねあひ」は、竹を探し出したことを意味する。これは、『御曹子島渡』に「やがて見つけ給ひ、人にものを

言ふごとく、言葉を交し、取り上げさせ給ひし」と弘法大師が竹に呼びかけて拾いあげる本文があり、清涼寺本③流沙川から竹を流すときに「万里のしほりに言づて」たことと対応する。よって、弘法大師が言葉をかけた通りに十三湊で探し出すことができた竹から、三つの笛「青葉」「蟬折」「小枝」を作ったということになる。

横笛出生譚には、弘法大師と大聖文殊の知恵比べは書かれないが、弘法大師が「大聖文殊」から竹を得たとする点において、幸若舞曲『笛の巻』をふまえていることがわかる。

横笛出生譚にある弘法大師笛説話は、弘法大師が天竺流沙川に流した竹から三管の笛を作ったというもので、幸若舞曲『笛の巻』にある義経の笛由来と近似する。また『御曹子島渡』とも対応する本文があり、かつ、竹は大聖文殊から得たものであることや、「十三」という地名などから、義経物と関わって生成されたことが考えられる。

三二 横笛出生譚と義経物

笛説話だけでなく、横笛の出生にも義経物との関わりが見られる。『浄瑠璃御前物語』には浄瑠璃御前の母矢矧の長者と父兼高が申し子の祈誓をする場面に、「みぞ

ろ野池」「鞍馬の多聞堂」の名がある。

浅間の嶽の麓にみぞろ野池とてありけるが、その池の主にてありし時、山河江河の鱗を取つて服したその咎に、いまだ子種はなかりけり。長者に生まるゝ事も、浅間の嶽より尊き御僧の下り給ひて、池のほとりの観音に百日籠らせ給ひつゝ、昼は一部の経を読み、夜は念仏夜もすがら聴聞したるその奇特に、今は矢矧の長者と生まるゝなり。

夫源中将兼高と生まれぬその先は、いかなるものと思ふらん、雲高き峰に棲む鷲の鳥なりけるが、万の小鳥を取り尽したるその科に、これも子種はなかりけり。されどもさすがなる瑞相有。鞍馬の寺多聞堂にて法華経読誦の声を聴聞したるその功力に、今は三河の国に国司と生まるゝなり。さらに子種はなかりけり。^④

浄瑠璃御前の母である矢矧の長者は、かつて浅間嶽の麓にあるみぞろ野池の大蛇であったという。鞍馬ではなく浅間嶽の麓となっているが、横笛出生譚にある「深泥池」の「大蛇」と共通する。長者の前世、大蛇はあらゆる生き物を取つて服した咎めによって、矢矧の長者に生まれ変わった今も子ができない。同じように矢矧の長者の夫源中将兼高は、かつて鷲であり、万の小鳥を取り尽くし

た咎めて三河国の国司として生まれた今も子ができない。
三河の国の国司に生まれ変わることができたのは、「鞍馬の多聞堂」にいて法華經を聞いたからで、二人はその後、薬師仏から子種を得て浄瑠璃御前を生む。横笛は、父が大蛇であり、その正体は鞍馬の多聞天であった。横笛と浄瑠璃御前、どちらもその出生に大蛇と鞍馬が関わっている。

大蛇が鞍馬と関わるのには、横笛の父大蛇が没する「康応元年三月廿三日」という日付が『融通念仏縁起絵巻』の版本製作に関わることが指摘されており、また、『融通念仏縁起絵巻』には、融通念仏の宗祖良忍が鞍馬寺に参籠し、夢告を得る場面がある。さらに、『融通念仏縁起絵巻』による勧進を推進した良鎮は、横笛説話を伝える滝口寺の開祖である。⁽²⁶⁾

横笛説話を伝える寺院は、滝口寺に限らない。高野山大円院には横笛が鶯に転生して滝口入道のもとに現れるという鶯転生譚が伝わっている。また、それは『鶯の弥陀の事』という『信州西光寺縁起』に合綴される物語にも詳しく語られ、大円院の本尊「鶯の弥陀」は滝口の前で息絶えた鶯を納めたものであるという。⁽²⁷⁾『鶯の弥陀の事』にある横笛説話は『平家物語』『横笛』に近い本文となっている一方で、清涼寺本のように出生譚をも含む。

ここにある弘法大師笛説話は、

扱、此笛は、弘法大師入唐の時、惣嶺山の麓に、文殊菩薩に一本の竹を授り給ひしが、其時大師、吾此竹に縁有れば、日本に廻り逢んと、海の面へ投給ふに、其後大師、帰朝し給ひ、土佐の国にて其竹に回り逢給ひ、三管の笛に作り給ひ、青葉、蟬折、小松^(マツ)といふ名管也。⁽²⁸⁾

とあり、清涼寺本や八宮本よりも簡略化されている。弘法大師の言葉「縁有れば、日本に廻り逢ん」は、幸若舞曲『笛の巻』「契りのあらば、日本にて巡り会へや」、「御曹子島渡」「縁あらば、また日本にて巡り会ふべし」に近く、高野山における横笛説話においても、弘法大師笛説話と義経物との関わりが窺われる。

横笛の物語は、高野山の語り物として伝承される一方で、それだけでは本文が生成されなかったことを弘法大師笛説話は示している。「蟬折」「小枝」という『平家物語』ゆかりの笛を登場させながら、その由来譚は『平家物語』ではなく義経の笛由来を語る幸若舞曲『笛の巻』を意識する。

三―三 笛の効能

『横笛草紙』が笛を介して義経物と関わるのには、物

語における笛の効能が関係しよう。『浄瑠璃御前物語』「吹上」段には、笛と大蛇が結びつけられる。義経が病にかかって宿屋から追い出され、吹上の浜に倒れた場面に、義経の持ち物である「古年刀」「友切丸」「漢竹の横笛」「皆紅の扇」が姿を変えて現れ、みな、倒れた義経の身を守る。「漢竹の横笛」は大蛇となつて義経に寄り添う。笛が、主である義経の身を守ることは、幸若舞曲『笛の巻』にも示される。

此笛を持ちぬれば、災難更に来らず。仏神の加護に預かる。重宝して候を、いかなる人か申けん、上様までも聞召、召し置かせ給へば、力に及び候はず、若君」とこそ申けれ。

弥陀次郎の言う「此笛」とは、『笛の巻』に登場する三管の笛「大水龍」「小水龍」「青葉」である。『浄瑠璃御前物語』にある「漢竹の横笛」は「蟬折」で、『笛の巻』にある三管の笛とは一致しないが、義経を守護する効能が共通する。「蟬折」は、『浄瑠璃御前物語』の他にも『烏帽子折』『御曹子島渡』に登場し、「弘法大師の蟬折」として難を避け、靈威ある笛として描かれる。

『横笛草紙』で横笛に渡される形見の笛は「青葉」である。横笛の末路は入水という悲劇を辿るため、義経の「弘法大師の蟬折」を選択することはできない。加えて

「蟬折」「小枝」は『平家物語』ゆかりの笛である。そこで「青葉」が選ばれたのであるが、弘法大師の「青葉」は幸若舞曲『敦盛』や『須磨寺笛之遺記』に見え、敦盛の悲劇を語る笛でもある。『横笛草紙』にある弘法大師笛説話の本文が義経物と深く関わることから、敦盛の伝承をふまえて「弘法大師の青葉」を選択したと考えるのは難しい。義経の「弘法大師の蟬折」を避けたところ、偶然にも敦盛の悲劇を語る笛「弘法大師の青葉」と重なったのであろう。須磨寺で敦盛の「青葉」が幾度も開帳され、「弘法大師の青葉」は敦盛の笛として周知されていた。清涼寺本、八宮本以外の『横笛草紙』諸本には横笛出生譚はなく、横笛の名の由来も書かれない。滝口と横笛の二人の物語により重点をおく他本⁽²⁹⁾において、弘法大師笛説話が義経物と関わり、かつ敦盛の伝承を想起せるものであることは、かえって不必要な背景となる。横笛出生譚は、横笛という女性の特異な出生と、その名の由来とを語り出すものであり、高野山という弘法大師入定の聖地霊場の唱導にふさわしい。横笛という名には、笛の威徳を語る義経物の背景があり、また敦盛の「弘法大師の青葉」の伝承が重ね合わされる。このことは、笛の伝承が様々な説話と繋がり、笛の威徳と人物が強く結びつけられることを示している。

おわりに

『横笛草紙』横笛出生譚にある弘法大師笛説話は、幸若舞曲『笛の巻』の内容を踏まえて横笛の形見の笛由来を説く。大蛇は横笛の母侍従に対し、生まれる子が「もし女兒ならば力なし。此笛ともに屠戮して」土に埋めるよう指示する。侍従は生んだ子が女兒であることを知り嘆き悲しみ、「父が遺言を違うべきともあらざれば」として、山にその女兒を捨てて。その際に、侍従は「虎狼野干もとらばとれ、その名をかたどり横笛と名付け」た。山に捨てられた横笛は十五年に入道相国に見初められ、建礼門院の侍女となる。「横笛」という名には、笛の威徳がある。横笛は、鞍馬の多聞天の子であり、滝口入道が高野聖となる機縁を与える聖者ともいえよう。⁽³⁰⁾

清涼寺本『横笛草紙』横笛出生譚は、義経物にある弘法大師笛説話を用いて横笛の名の由来と、横笛という女性が特異な存在であることを語る。義経物の幸若舞曲『笛の巻』が弘法大師の入唐説話を語り、また『御曹子島渡』『浄瑠璃御前物語』『烏帽子折』が弘法大師の笛を靈威ある笛として登場させるように、『横笛草紙』横笛出生譚もまた、弘法大師の笛の威徳を強調する。さらに敦盛の笛は、弘法大師の青葉として須磨寺の什物となる。弘法大師の笛は、高野の語りに限らず物語を横断し、伝

承されることで、その威徳を語り出すのである。

付記 貴重なご所蔵資料の調査と研究をお許し下さった浅見和彦先生に感謝申し上げます。なお、本稿は、伝承文学研究会平成三十年度名古屋例会にて口頭発表した内容による。その際、席上様々なご意見ご指導を賜りました方々に心よりお礼申し上げます。

注

(1) 松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目錄」(奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年)、日本古籍総合目録データベースによる。

(2) 清涼寺本の位置づけについては、松本隆信「御伽草子本の本文について―小敦盛と横笛草紙―」(『中世庶民文学―物語草子のゆくへ』汲古書院、一九八九年)、竹本宏夫・徳江元正「横笛草紙」(『伝承文学資料集 第二輯』三弥井書店、一九六七年)、池田敬子「横笛草紙」本文の流動」(『軍記と室町物語』清文堂出版、二〇〇一年)を参照。

(3) 本文は『平家物語①』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年)による。以降『平家物語』の引用も同書による。ただし、巻第九は『平家物語②』から引用した。底本は語り本系のひとつである覚一本。読み本系には細かな異

同が見られるが、由来譚はほぼ共通。なお、引用する際、適宜私に新漢字や濁点をあて、句読点を施した箇所がある。以下、諸作品からの引用にも同様の加工を施す。

- (4) 『平家物語』巻第四「宮御最期」に「小枝ときこえし御笛も、いまだ御腰にさゝれたり。」とある。

- (5) 敦盛の笛を「小枝」とするのは語り本系と『源平盛衰記』であり、読み方や表記に異同があるものの、名は「小枝」として一致している。『源平盛衰記』以外の読み本系では、敦盛が所持したのは「筆簾」とする。これらの笛異同については、佐谷真木人「語り本『平家物語』における敦盛像」(『平家物語から浄瑠璃へ 敦盛説話の変容』慶應義塾大学出版会、二〇〇二年)に詳細な論考がある。

- (6) 本文は、『舞の本』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九四年)による。以降に扱う幸若舞曲の本文も同書による。

- (7) 田代幸子「笛が形成する平敦盛―筆簾・横笛から青葉の笛へ」(『学習院大学国語国文学会誌』五五号、二〇一二年三月)によれば、『平家物語』では以仁王と敦盛の「小枝」がそれぞれ別の笛であったものを同一の笛とすること、(「えだ」「さえだ」と読み方で区別していた「小枝」の混同を解消させているという。

- (8) 鎌倉時代の楽書『教訓抄』『続教訓抄』には「蟬折」「小

枝」は見られず、時代は下って元禄三年(一六九〇)刊の楽書『楽家録』に「蟬折」「小枝」「左枝」の名と、その由来が記されるようになるが、その笛の説明も『平家物語』による内容となっている。

- (9) 本文は『続教訓抄』(覆刻日本古典全集、現代思潮社、一九七七年)による。

- (10) これらの混同に関しては、福田晃「神道集〈諏訪縁起〉の方法―「秋山祭事」「五月会事」をめぐって―」(『立命館文学』五〇五号、一九八八年三月)、濱中修「神道集諏訪五月会説話考―笛と王権―」(『沖縄国際大学文学部紀要 国文学篇』十六巻二号、一九八八年三月)に詳しい。

- (11) 本文は、『謡曲集①』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年)による。

- (12) 『須磨寺笛之遺記』については、後藤康宏「『須磨寺笛之遺記』と『小枝の笛物語』をめぐって―附・翻刻―」(『伝承文学研究』三二号、一九八五年五月)、徳田和夫編『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇二年)を参照した。また、『須磨寺笛之遺記』の成立は室町後期かとされる。本文は『平家物語』の筋書きに拠り『平家のぬき書』とも称されるが、諸本に見えない本文も含まれる。

- (13) 本文は、注(12)後藤氏論文にある福祥寺本翻刻による。以降『須磨寺笛之遺記』の引用も同論文による。

(14) 本文は、三浦真巖編纂『摂津国八郡福祥寺古記録 須磨寺「当山歴代」』（大本山須磨寺塔頭正覚院、校倉書房、一九八九年）にある付録『摂州須磨寺略縁起』による。

(15) 本文は、新日本古典籍総合データベースにあるお茶の水女子大学図書館のデジタル資料による。他にも、延享三年（一七四六）開板の『須磨浦古跡記』「敦盛の遺物、青葉の笛、高麗笛など宝物多し」（国文学研究資料館デジタル資料）などがある。

(16) 本文は、三浦真巖編纂『摂津国八郡福祥寺古記録 須磨寺「当山歴代」』（大本山須磨寺塔頭正覚院、校倉書房、一九八九年）による。

(17) 『幸若舞曲研究 別巻』（福田晃他編、三弥井書店、二〇〇四年）所収「笛の巻」解説、新日本古典文学大系『舞の本』所収「笛の巻」解説参照。なお、幸若舞曲『笛の巻』にある弘法大師笛説話が『横笛草紙』や『須磨寺笛之遺記』に存在することも指摘されている。

(18) 本文は、『室町物語草子集』（新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇二年）による。底本は近世初期の大型絵巻とされている秋田県立図書館蔵絵巻。なお、笛の名は諸本間に異同がある。赤木文庫蔵絵巻や渋川版御伽草子では、「大唐丸」とあり、弘法大師笛説話も見られない。幸若舞曲『笛の巻』をもとに挿入し、「大唐丸」を「蟬折」に変

更したか。

(19) 義経の「草刈笛」については、『幸若舞曲研究 別巻』所収「烏帽子折」解説に、「牛若の物語が内蔵する音楽、特に笛の「威徳」の主題を、用明天皇の物語がより鮮明に印象付ける働きをしている」という指摘がある。

(20) 本文は、『古浄瑠璃 説経集』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九九年）による。以降「浄瑠璃御前物語」の引用も同書による。底本は、MOA美術館蔵本。なお、笛の名は諸本間に異同がある。山崎美成旧蔵本「横笛」、大東急記念文庫蔵本「漢竹の横笛」、赤木文庫旧蔵絵巻「大唐丸」など。

(21) 新日本古典文学大系『古浄瑠璃 説経集』校注一四「かの蟬折」には、幸若舞曲『烏帽子折』に蟬折が弥陀次郎から買い取った弘法大師由来の笛であることが記されていることから、MOA美術館本や前島本が「かの」と前を承けた文辞をとるのは『烏帽子折』の影響下にあるからである」と述べる。

(22) 本文は、『室町時代物語大成 第十三』（角川書店、一九八五年）による。

(23) 本文は、浅見和彦氏蔵伝八宮良純親王筆写本を翻字し、浅見和彦『説話と伝承の中世圏』（若草書房、一九九七年）にある全文翻刻を適宜参照した。

(24) 八宮本が出生譚を横笛末路の重要な伏線として「形見の笛」を強調するために起きた異同である。拙稿『横笛草紙』本文の成長―八宮本を中心に―(『伝承文学研究』十六号、二〇一七年八月)。

(25) 浄瑠璃御前の母矢矧の長者と父兼高の前世は、諸本に異同がある。母の前世「みぞろ野池の主」は赤本文庫本では「あさはいけの大蛇」、大東急記念文庫本では「浅香の郡の沼の毒蛇」とあり、古活字本や刊本では「たかの沼」と記される。また、父兼高を「那智山の鷺」とする本もある。ちなみにこれら異同の見られる本は、義経の笛の名も同様に異なる。

(26) 阪口弘之『横笛』と高野伝承(『近松研究の今日』和泉書院、一九九五年)に横笛説話と『融通念仏縁起』、良鎮について詳細な考察がある。また、『融通念仏縁起』を携え勧進を推進したのが滝口寺の開祖良鎮であることから、『横笛草紙』が鞍馬と高野を結びつける一本であり、「横笛は、高野と鞍馬という二つの聖地を結んだ伝承の裡に誕生したのである。」と述べる。

(27) 『鶯の弥陀の事』は、阪口弘之氏蔵『信州西光寺縁起』(外題『刈萱同心由来西光寺縁起』)に合綴されるもので、弘化二年仲春写。末尾に「尾州百秀撰」とあるが、尾州百秀は未詳。同氏「高野の伝承二題―弘法大師御伝記」

『鶯の弥陀の事』―(『大阪市立大学文学部紀要人文研究』四十四卷十三号、一九九二年十二月)に全文が翻刻されている。

(28) 本文は、注(27)の阪口氏論文の翻刻による。

(29) 池田敬子「横笛草紙―本文の流動」(『軍記と室町物語』清文堂出版、二〇〇一年)は、『横笛草紙』には、仏法色を強く残す清涼寺本系統と、滝口と横笛の心情描写を強調する慶應本系統が存在し、更に滝口入道が高野聖として尊ばれた結末を削除する御伽草子本に至っては、仏法色の強い本文が取捨選択されたことを指摘する。

(30) 高野山の麓にある天野別所に、横笛が出家して移り住んだという伝承がある。天野別所には丹生都比売神社があり、弘法大師を高野山へ導いた丹生都比売明神を祀る。導く女性として、丹生都比売明神と横笛とが重ねあわされることが、濱中修「横笛伝承考―法華寺・天野別所―」(『平家物語とその周辺―女性たちの物語』新典社新書、二〇二〇年)に詳しく述べられている。

(ひぐち・ちひろ／名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程)